大地から小さな学校のおたより

ブラジル第三アリアンサ富山県日本語学校便り
ＮＯ８　３月号

３月は、日本人にとって別れの季節ですね。昨年まで私が教壇に立っていた富山県立にいかわ養護学校の生徒たちも卒業です。私の人生に大きな影響を与えてくれた生徒たちとの別れは、「ありがとう」「さよなら」では言い尽くせないほどのやるせない思いがこみ上げてきます。地球の裏からではありますが、卒業生たちが新たな環境で力強く、そして笑顔で生活できることを切に祈っています。

ここアリアンサでは、ビザ再申請のために帰国する先生、任期を終えて帰国する先生方がいます。３月は先生方の卒業式と言えそうです。

西森先生　さよなら

日本では、３月と言えば卒業式ですね。ブラジルでは年度の始まりが２月なので、卒業式はありません。しかし、日本から派遣されている先生方の中には３月で帰国する先生方がいます。アリアンサの近くにあるミランドポリス市高岡日本語学校の西森千賀子先生は４年の任期を終え、高岡へと帰って行きました。このアリアンサ周辺地区の派遣教師では、最長記録となり、多くの人が別れを惜しんでいました。私も８ヶ月間お世話になり、頼もしい先輩がいなくなってしまったかと思うと、さみしく感じます。

同じ富山県出身ということもあり、第３アリアンサの行事に幾度も参加してもらいました。ささやかではありますが、第３アリアンサの生徒たちや保護者たちと一緒に、お別れ会をしました。お別れ会では、西森先生にとって最後のシュハースコ（焼き肉）をし、そしておもてなしのお返しに、西森先生と私で「親子丼」を作りました。西森先生の大胆な味付けは意外に美味しく、初めて食べる生徒たちもとても美味しそうに食べてくれました。西森先生長い間、本当にお疲れ様でした。

うどん会がありました。

「うどん会」と聞いて、どんなことを想像しますか？私は最初、「うどん会」と聞いて、「あーみんなでわきあいあいとうどんを食べるんだ、アリアンサの人たちは仲がいいのだなー」と楽観的に思っていました。

ところが、ここアリアンサの「うどん会」は、資金集めの大事な行事だったのです。今回のうどん会は「第３アリアンサ富山県日本語学校うどん会」と銘打ってあり、日本語学校運営資金を集めるための行事だったのです。前日から５００食分の麺を打ち、饅頭を作り、果物を用意し、来たお客さんに買ってもらうのです。いい加減なものを作ることはできません。少しでも美味しく、お客さんに満足してもらえるようにと第３アリアンサの人たち全員でこの行事を支えます。

当日私は接待係をしました。来たお客さんには握手をして、日系人には日本語で、ブラジル人にはポルトガル語で「ボアノイチ（こんばんは）オブリガード（ありがとうございます）」とあいさつをします。するとブラジル人の中にはポルトガル語で話しかけてくるお客さんがいます。私は冷や汗をかきながら、分かったふりをしてうなずくのが精一杯でした。しかし時間が経つに連れ、慣れてくると、笑顔で「ごめん、わかりません」と日本語で謝っていました。開き直りというものは怖いもので、謙虚さを失ってしまうものだと改めて実感してしまいました。

おかげさまで、たくさんのお金が集まりました。これでしばらく日本語学校の運営ができそうです。村のみなさん本当にありがとうございました。

ハチ鳥の巣に、雛が生まれました。

ホームステイ先の吊るし鉢に、ハチ鳥の巣があります。昨年８月から、そのハチ鳥の様子をずっと見ていたら、お腹の黄色い雄鳥、緑色の雌鳥が一生懸命巣を作っていました。夜になるとその巣に戻り寝泊まりし、朝になると雄と雌が交互に巣を出入りしていました。私が近寄ると、「バタバタっ」と飛んで近くの電線に止まり、様子を伺っては、危険人物が去るのを待っていました。

３月に入ると、「シャーシャー」という音が聞こえてきました。「もしかして？」と思い、巣をのぞいてみると、２ｃｍほどの雛が３匹、口を開けて鳴いていました。あまりにも小さい雛で驚きましたが、なんとも言えない力強さを感じました。ホームステイ先のお母さんも「去年から２匹が一生懸命巣を作っていて、やっと生まれたんだよ」とうれしそうに教えてくれました。小さな出会いでしたが、とても貴重な出会いをしたように思いました。

「スーホの白い馬」

ここアリアンサでは、モンゴルはなじみのある国です。なぜかというと、NHK国際放送を見ている人が多く、モンゴル出身の両横綱、朝青龍、白鳳はとても有名だからです。

しかし、日本ではモンゴルという国は、この両横綱を知る前から有名な国の一つでした。フビライハーンによる大陸統一は有名な歴史上の出来事であり、国語の教科書で紹介されていた「スーホの白い馬」（今現在はわかりません）も日本人が知る有名なモンゴルのお話の一つです。昨年、本屋さんでこの絵本を見つけた時、懐かしくて思わず立ち読みをしてしまいました。

日本文化を考える時、どうしても私自身が受けてきた教育を思い出します。保育園に通っていた頃、先生が「スーホの白い馬」を涙を流しながら読み聞かせをしてくれたことがありました。言わば、大人の涙を見た初めての強烈な体験の一つです。そのお話は小学校に上がると教科書で習いました。幼い頃涙して読んでくれたお話を改めて勉強し、「自分にとってかけがえのない物」を考えるきっかけにもなりました。また挿絵も広大な大地に繰り広げられるスーホと白い馬の絆を描き出しており、この本が出版されてから、３０年の月日が流れても強烈な印象として残っています。絵を描いている私にとっては、「スーホの白い馬」は心の原風景の一つと言っても過言ではありません。

日本文化は、必ずしも独自で発展してきたわけではありません。漢字、宗教、思想、科学技術、多くの物は外国から来ました。死んだ白い馬を馬頭琴にして美しい音色とスーホと共に生きる姿は、物を大切にして生活してきた日本人の心に共感を与えており、そして外国文化を多分に吸収してきた日本人の生き方の価値観にも、このモンゴルの話が少なからず影響しているようにも思います。

４月からは、「スーホの白い馬」の影絵劇に挑戦しようと思っています。外国文化を知ることで日本文化を知る機会にし、影絵制作を通して日本人の「ものづくり」精神にも触れることができるようにしたいと思います。おそらく、広大な大地と白い馬の話は、同じ環境に生きるここアリアンサの子供たちにも、何か伝わるのではないかと信じています。

画像は影絵を実験的に作っている様子です。あまりきれいに映っていないようです。改良を重ねて、いいものができるようにしたいと思います。

挿絵　「大地の日記」―風の中―　２００９年３月制作